

ときに保安官、ときに十手持ち

# 人情派の駐在に「カッコイイ」なドラマあり

緻密な推理とチームプレーで犯人を追いつめる刑事とは正反対に

駐在警官は日々、地元の人々とともに、地域の安全を地道に守り続ける。

そんな駐在を「カッコイイ」と評する作家の佐々木譲さんに

駐在や警察という組織そのものの魅力を語ってもらった。

作家

## 佐々木譲

●ささき・じょう 1950年北海道生まれ。幅広いテーマの執筆活動を展開し、直木賞をはじめ、数々の文学賞を受賞している。警察小説も数多く手がけており、近著に『憂いなき街』（角川春樹事務所）などがある。

### 実在の駐在所を舞台に

——佐々木さんは数多くの警察小説を手がけていますが、駐在を主人公にした作品も書かれています。

駐在を題材にした警官小説は二つあります。

一つは『警官の血』（新潮文庫）シリーズで、主人公の名をとって「安

城シリーズ」ともいいます。三代にわたる警官の物語で、初代と二代目は東京・台東区の谷中にある天王寺駐在所に住んでいた設定になっています。

天王寺駐在所は実在の駐在所で、『警官の血』の核となる警官一家にも、実はモデルが存在します。櫻さんという、天王寺駐在所の元駐在警官とそこご家族です。

『警官の血』では、物語の時代設定と櫻さんの現役時代とが微妙にかぶってしまったんですが、小説に描かれていることは、もちろんフィクションです。

私自身、結婚した当初から谷中に住んでいて、小学校に上がった娘の運動会の際、来賓として来校していた櫻さんに、初めて身近に接したんです。

そのとき、近隣に住む子供たちが、櫻さんを「お巡りさん」としてではなく、「櫻さん」というひとりのオジサンとして認識しているのを知って、こういう人間関係が生まれるなんて、谷中っていいとこだなあと思

つて。それが駐在さんを主人公にして何か書いてみたいと思った一つのきっかけでした。

櫻さんは子供たちだけでなく、地域のみなさんから大変親しまれていたの、警視庁のほうでも異動させずにずっと駐在勤務をさせていたよう

です。  
——地元の人たちに慕われる駐在さんを異動させてしまうのは、地域にとってもマイナスだったんでしょ

ね。  
櫻さんは四半世紀以上、天王寺駐在所にいられたんですよ。これはなかなか粋な人事だと思います。

### 駐在はカッコイイ！

もう一つの駐在小説が、『制服捜査』（新潮文庫）と『暴雪圏』（新潮社）の二つに収録されたシリーズで、こちらは北海道警の駐在を主人公にしています。

北海道の田舎を舞台にしたこのシリーズには、都心にある天王寺駐在所とはまた違った性格の駐在所が出てきます。

北海道では管轄エリアが広大なので、警視庁管内で一駐在が受け持つ地域のおそらく十倍か、あるいはもっと広い地域を管轄しなければなりません。

エリアが広いぶん、駐在所と本署もかなり離れているので、事件の通報から、下手したら二時間くらいは一人も応援が来ない事態が考えられ

ます。都内のように通報から五、六分でパトカーが来るような環境とは、わけが違うんです。こうした地域の特殊性は、物語の重要な設定になりました。

応援が来るまではたった一人で地域の安全を守らなくてはならない駐在警官は、西部劇の保安官の姿と重なります。『制服捜査』は、私の頭のなかでは「西部劇の保安官もの」という位置づけなんです。

——駐在を主人公にして話が続くかどうか心配だったという話をどこかで読んだ記憶があるのですが……。

それは、文庫のあとがきに書いたかもしれません（笑）。

もともとこの話は、『小説新潮』の警察小説特集のために書いたんです。ほかの書き手の作品もありますから、題材が重なっちゃいけないと思って、「○○さんだったら、公安